

郭 述柔（カク シュウジュウ）さん 台湾 鹿屋市 鹿屋体育大学留学生

タイトル：ずっとここから

日本で野球部のマネージャーとして毎日野球場を通うなんて、一回も考えたことがありませんでした。高校の時、私はマネージャーで、野球部のみんなとずっと甲子園を夢見ていました。「いつか台湾も日本の甲子園みたいに、すごい試合ができるかなー」と願っていました。18歳の私の夢は日本に行って、甲子園のことを学び、本を書くことでした。しかし、この情熱は大学に入ってから、だんだん薄れていきました。

留学する前に鹿屋体育大学に野球部があることを知っていましたが、マネージャーになれるとは思わなかったです。ですが、監督は私のことを聞き、優しくぜひ入ってくださいと言ってくれました。最初の三か月は大変でした。私はドリンクを作ることしかできませんでした。話かけてくれる人もあまりいませんでした。全員を紹介するためのビデオには私の名前だけ出てきませんでした。私はいつも選手たちと同じ練習に行ったり、部費を払ったり、ユニフォームを買ったりしているのに、紹介されませんでした。その時は本当に悲しくて、やめたかったです。ところが、やはりみんなのことが大好きです。みんなの笑顔をもっと見たいです。みんなを応援してあげたいです。マネージャーを続けられるのは、この気持ちのおかげです。

半年が経ちました。毎日野球場で過ごす生活に慣れてきました。いよいよ春季のリーグ戦が始まり、それが終わったら、四年生はほとんど引退しなければなりません。つまり、この試合は四年生の選手たちにとって、人生最後の試合になるかもしれないのです。公式試合としては、私にとって最後の試合です。ずっと、勝てると思っていたが、敗れてしまいました。九回の裏、私たちのチームは負けていたにもかかわらず、キャプテンが思いきり一塁に走りました。普通は絶対アウトになるプレイだけれども、セーフでした。その瞬間、写真を撮っていた私は泣き出してしまいました。一塁のキャプテンも、次のバッターも。最後の日みんな泣いていました。「カクちゃん、ありがとうね。日本に来てくれて」キャプテンは相変わらず優しく言うてくれました。その日の光景、みんなの笑顔と涙、私は一生忘れません。

日本にいる時間は、あと二か月しかありません。きっと、あっという間だと思います。台湾を離れたときは確かにきつかったけれども、今回の別れはその何倍つらいだろう。つらいのは別れたら、会いたくても会えないからです。これから、私たちはそれぞれ自分の人生の道で歩きます。今を駆け抜け、いい大人になって、素晴らしく生きていこう。別れを繰り返すことは人生の過程です。人生はまるでバスのようなものだと思います。このバス停で誰か降りて、次のバス停に着いたら、また誰か乗ってくれます。なので、どれだけ悲しくても立ち止まってははいけません。進もう。彼らに会ったのは奇跡だと私はずっと思っています。私のことを忘れないでください。この一年間一緒に過ごした日々、私も忘れま

せん。また、会おう。その時、自分の夢が叶うかどうか、教えてくださいませんか？